

## 盛里地区

神社名 石船神社

鎮座地 都留市朝日馬場四四二番地

祭神 表筒男命



中筒男命

底筒男命

### 例祭

八月一日

### 神事用具

神楽、神輿保存。

神楽は七月二十

日、境内社八坂

神社の祭りに出

御する。

### 由緒

延元二丁丑年（

一三三七）七

月、高根山の頂

の清池をえらび

祠を送って石船明神を祀った。此の地は眺めはよいが危険で不便のため、文禄三<sup>甲</sup>午年（一五九四年）七月一日現在地に社殿を造営した。

御神体は石の船で、宝物として刀があるという。

正徳三年（一七一三年）に鳥居を建立したが朝日川の洪水で流失した。

山梨県市郡村誌に

〔石船社〕 社地東西拾壹間壹尺寸南北貳拾壹間壹尺寸面積

貳百三拾七坪本村中央馬場組ニアリ云々 とある。

甲斐国志には

一〔石船明神〕<sup>朝日馬場村</sup> 本村産神ナリ社地六畝貳拾歩除地祭礼七月

朔日 神主同上（井倉村柴村美濃） となっている。

### 社殿

本殿 流造り銅葺、一間半||一間半。

屋根両側に菊の御紋章がある。

拝殿 入母屋トタン葺 三間||二間。

拝殿より廊下を経て本殿に至る。

舞殿 入母屋トタン葺、七間||四間。

神庫 一棟コンクリートブロック造り、一間半||一間。

神灯 本殿前一对 享保六年（一七二一年）

拝殿前一对 宝曆十三歳癸未（一七六三年）

鳥居 石造一基 昭和九年七月吉日奉献

鈴 一

### 境内社

三社あるも祭神については不詳。

境内に忠魂碑並に郷土力士旭山の碑がある。明治三十三年のものである。

そのためか、この神社では近郷近在の力自慢が集まって奉納相撲が行なわれたが今は中止されている。

境内には杉、榉、銀杏等の大樹が整然と社殿を囲み、その厳肅さに自ら襟を正すのである。また伝説の歴史を偲ぶ。

### 大塔宮護良親王の伝説

南鶴神社誌に

「伝説によると、護良親王の御首級をも合せ祀ると、此の御首級は面長八寸横五寸三分額周一尺八寸腮囲二尺一寸右眼開き左眼水玉を以て嵌す。竹原八郎宗親一女雛鶴姫は御首級を持ち富士登山者に仮装して来タリ秋山二入り御産の為宿を乞いしが断られ（今の無情野）村境の峠を越し（今の雛鶴峠）旭部落にて王子を産み前後して姫も死す。

錦のふくさ、従者旅日記、桐、菊紋章入香炉、茶釜、鎌倉と書いた石棺等遺品ありと。」と記されている。

また石船神社境内名所案内板によると、

「石船神社

石船神社は大塔宮護良親王の御首級を祀る宮なり、昔建武二年七月十七日護

良親王は鎌倉の土牢にて瀧部伊賀守義広のために殺害せらるるや、寵姫雛鶴姫は從臣の正四位左近中将藤原宗忠、菊地二郎武光、馬場小太郎正国等御首級、御守刀を奉持して相摸小田原より、青根村を経て甲斐秋山村無生野より、王旅峠を越え昔の鎌倉街道をこの地にのがれて、石船神社に奉安し從臣等は付近に落ちて農民となり現在に至れり。

同神社は明治初期迄は（朝日小沢、玉川、戸沢、井倉、与繩、朝日馬場、朝日會館）朝日七郷の宮であった。尚毎年一月十五日早朝御首級の拝観をなす例あり。」とある。

護良親王のミイラ、日本最古の復顔術!!

昭和五十二年（一九七七年）十月二十一日、東京、成城大学教授（人類学）らの調査団は、石船神社に伝わる復顔を鑑定した。この復顔は護良親王（一三〇八一—一三三五）のミイラといわれていたが、この日の鑑定で復顔としては日本最古のもの。という見方が強まってきた。調査団は鑑定に基づいて、近く総合的な結論を出すという。

今年（昭和五十二年）の一月十五日の初祭りのとき、鈴木教授が鑑定して、「ミイラ首は人間の頭骨に寄せ木細工で肉付けして顔の形に復元、その上にうるしを塗って復顔した可能性がある」と判定した。今回の調査は、復顔の方法、時代、組み立方法などを、ミイラ首を調べて鮮明しようと実施されたものである。

鈴木教授のほか、多摩美術大の山辺知行教授、独協医科大学の江藤盛治教授、国立博物館の佐藤昭夫彫刻室長らが参加して、レントゲンや赤外線などを使って、人間の頭骨、布、巻き糸、古文書を鑑定した。また同神社に伝わる刀剣、石船なども調査した。

親王の首級といわれている顔は、アゴや鼻が補強してあるが、実物大の人間の顔そっくり。右眼がないが、鼻すじが通っており、歯型もクッキリ。全体に濃茶色をしている頭には梵字が彫ってあった。レントゲン調査で人間の骨であることを確認、かなり古いものであることもわかった。

調査団は、「鑑定の結果を分析して、近く結論を出し、『護良親王』の首かどうかを鮮明したい」と話していた。

(以上は昭和五十二年十月二十二日の山梨日日新聞記事による。)

りの強い山麓を選んで、天神(アマツカミ)を祀って盛大な祈願祭を行ったところ、不思議と猛勢をふるった病が治ったという。また、いつのころからか牛馬も病気災害の防除祈願をするようになり、牛馬の購入、出生にあたっては曳きつれて参拝するようになったといわれている。

## 神社名 天神社

鎮座地 都留市朝日馬場

祭神 国立常命

### 例祭

例祭日は七月二十五日であったが、今は一月二十五日に行なわれている。

### 由緒

県道秋山線沿いで旭川(音無河原)に面し、通称岩切といわれる岩の窪地の中に奉祀されている。(別名)

鉄製朱塗りの鳥居一基がある。

伝説によると、明和二年(一七六五年)当村にコロリ病(コレラのこころしい)が流行し死者が続出した。その上農作物は虫害に逢い、人々は不安におののいていた。この災害からのがれようと、村中相談の結果神徳にすぎることになった。矢崎山の東方の風当

## 神社名 五社神社

鎮座地 都留市朝日會雌一五一八番地

祭神 天照大神

月夜見命

豊受姫命



保食命

誉田別尊

### 例祭

九月十五日例祭

日、

### 神事用具

神楽、神輿保存、

### 由緒

この神社の創立年代は不明であるが、五部落に分れていて、天神社、稻荷大明

神、落合稻荷大明神、神明神社、

八幡神社、山神社の六社が祀ってあったが、山神社を一社として他の神社は現在の所へ合せ祀るようになった。そのため五社神社という。弘化二年(一八四五年)のことであるといわれている。

明治五年村社に列格されている。

山梨県市郡村誌に

〔五社神社〕 社地東西式拾六間四尺寸南北拾七間面積四百五拾四坪本村東方會雌組ニアリ祭神未詳、とある。

甲斐国志には

一〔神明相殿社〕朝日會八幡村本村産神ナリ社地老畝歩見捨地例祭七月

廿一日井倉村神主兼以下ノ社皆同」とある。

### 社殿

本殿 流造りトタン葺朱塗り一間社。

舞殿 切妻トタン葺 五間〓四間。

神庫 一棟トタン葺 方二間。

鳥居 一基 木造朱塗り。

神灯 一基 明和六歳(一七六九年)建立。

本殿右側に大榿あり、目通り5m〓60cm

### 境内

南鶴神社に「境内地四百九十四坪云」とある。

### 境内社

八坂神社

本殿 流造りトタン葺朱塗り一間社。

例祭 七月二十日で神輿が出る。

なお雛鶴神社の御神体として、姫の守り本尊である天神様が合祀されているとの古老の話である。

### 神社名 雛鶴神社

鎮座地 都留市朝日曾雌（日影開戸）

祭神 雛鶴姫命、神直天日命、大直天日命、

例祭

例祭日は四月二十日、

お魂はこの社に奉遷される。

由緒

県道秋山線沿い雛鶴神社参道入口より約五百メートル、雛鶴峠にさしかかる山裾に神社がある。

社殿は昭和五十一年四月建替えられている。

この神社より約百メートル下に、樹令三百年余の老松二本がある。

雛鶴姫のお供の藤原宗忠、馬場小太郎二人の従臣のために植えら

れたものといわれ、これを称してお供の松という。

雛鶴神社に祀られている御神体は、大塔宮の守護神であり、姫の守護神でもある天神様の木像であると伝えられている。像の大きさは背丈四寸、弘仁九年（八一八年）空海奉作之と記してある。社の傍に姫を埋葬した塚があるとのことである。

#### 雛鶴姫についての哀話

石船神社のところで述べたが、大塔宮護良親王の御首級を持った姫は、従臣と共に鎌倉街道を秋山村に入った。無生野で親王の王子を身籠っていた姫は産気づき、民家に休養したいと願ったが、後難をおそれて村人は誰一人宿をかす者もなかった。それからこの部落を「無情野」といいのちに「無生野」となった。やむなく山頂についてここで王子をお産みになった。そして王子と前後して姫はここでお亡くなりになった。王子は葛城宮綴連王と申し上げた。従者は農民として土着したと伝えられている。

### 神社名 御嶽神社

鎮座地 都留市与繩一八九番地

祭神 素盞鳴尊

大己貴命

少彦名命

御神体

矢の根石（長10

cm・巾4cm）

例祭

九月三日

神事用具

神楽奉納

春祭りは四月十

六日に上手、日

向、日影の三部

落別々に行なわ

れているが、秋

祭りは三部落一

緒に御嶽神社の

祭りを行なう。

由緒

より奉遷した。

別の伝説によると、

藤原豊後守義政の守護神であったものを、後に村人が氏神として今の地に祀るようになった。という。

明治五年村社に列せられた。

山梨県市郡村誌に

〔御嶽社〕 社地東西式拾五間四尺寸南北式拾間面積五百拾四

坪本村西方与繩組ニアリ祭神素盞鳴尊祭日陰曆三月廿一日。とあ

る。

社殿

本殿 一間社流造りで銅葺、向拝、脇障子、柱に至るまで彫刻され朱塗りの立派なものである。

舞殿 五間三間 入母屋トタン葺、

鳥居 木造一基

神灯 一對 安永四己未年十二月吉日  
施主 前田勝右エ門  
前田金石エ門 とある。

太子碑 聖徳太子碑 大正四年三月二十二日石原謹書  
奉建者 白井民次郎  
谷内亀吉

境内

境内地二九三坪。



天正元年（一五七三年）源義政が、日影部落の南の山に隠城を造りその城の守護神として社殿を造って奉斎した。寛永六年（一六二九年）三月十一日、矢竹山麓に社殿を遷したが、矢竹山が崩れ落ち社殿が埋もれてしまったので一時井倉の生出神社に合祀した。宝暦十三年（一七六三年）に現在の場所に社殿を造り、生出神社

## 境内社

国立常命の天神社。牛頭天王の八坂神社、大己貴命の疫病神社等が奉祀されている。

朱塗りの鳥居隣り、石段登り口向って右側に尼僧の石造仏一体がある。右側面に享保八年（一七二三年）六月八日妙林、左側面に享保九年十月一日妙久と刻まれている。天正寺に関連あるものと興味深いものを感じる。

三部落の各氏神は次のようである。

上手部落 蚕影さん

日向部落 愛宕神社

日影部落 金比羅神社

右のうち、金比羅神社境内はもと与繩城のあった趾と伝承されている。